

特別講演

科学変動期の国際政治における日本の役割

成蹊大学名誉教授・前学長 宇野重昭

1. はじめに 科学の発展にたいする—社会科学者の見方

自然科学の発展により社会全体が変動
 変動が常態化 予想を超える速度と進度
 根本的疑問 “科学はどのようにして統合され得るのか”」

2. 社会科学の立ち遅れ 公害・環境問題を例として

対策は常に後手

1950年代 公害の指摘のはじまり
 1970年代 環境破壊の加速化に警鐘
 1990年代 対応策の国際的提唱
 2000年 対策に着手 この間に環境問題は一層深刻

遅れる背景：水俣病の体験から

学問的確認：分析の困難性
 戸惑う対策
 複雑な社会と権力の構造（企業権力・政治権力）

国際化する困難性：グローバリズムの光と影

公害・産業化・エネルギー問題の国境を越えた拡大
 政策決定の指導権を失う“主権国家”
 普遍的価値の名による“内政干渉”

3. アメリカの対応と「覇権」主義

アメリカの“敏感な”知的世界

国際関係学会（ISA）の問題意識 “多国籍企業の時代” “主権を超えて”

独善的普遍主義の危険性と「覇権」の肯定？

ただ一つの超大国と相対的に弱体の連邦国家の矛盾
プレッシャー・グループ・企業利益に圧迫される国家
脆い集権政治と不安定な外交

4. 日本の立場

基本的に対米協力

入り組む経済的利害関係
対米指導権をもち得ない科学技術・知的所有権
アメリカ的価値意識の浸透

矛盾の側面

日本国憲法と平和主義の存在 : 力の政治と距離
国連にたいする寄りかかり : 多国籍軍をめぐる論争と憲法の制約
アジア的価値との相克 : 自然、調和、人間主義

日本の問題点

状況対応と異常突出 : 日本の外交政策の特徴
現実主義と一元的理念の癒着、戦略論の欠如
集団主義 : 自主性、独創性の欠如

5. 現代世界における日本の存在理由 東西の“架け橋”から独自の自己主張へ

東西文明対決の時代には“架け橋”は脇役

多様な価値意識	清、美、情
→多元論	多神教からの内発的発展 : 今後の世界のモデルか
複雑系日本型システム	「間人」による組織形成 : 複雑性が常態の時代
個に内在する普遍観	個と普遍性の同時的把握 : 政策決定の能率化